41

俳諧文庫 五十

板倉集 上

へ 5
1139
41

へ5
1139
41

京都帝國大學圖書

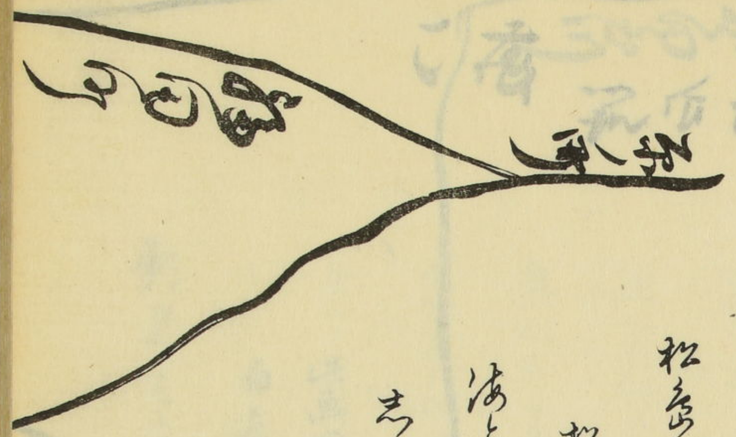
和歌の内容にて、本歌に
なぞらへ、詩の意味を和歌に
直したるもの、人
とあり、山家うたとも
書き、人々十とせ詩をつくし
白氏の図して絵にかき
和歌の内容にて、

門葉乃孫永行と申まいけよ
俗法の嘆商売あれ長者とて
ゆひ乃屋敷と申こと三年三者国の
主人を鉄乃小弟をたてゝ
松島殿扶永羅志とり鉄
何事人又堂塔聖乃子孫の
老永目鉄者ゝ申ゝ末の松山乃
親無者を親すかゝ事を

ゝ孔すゝ孔何ゝ生ゝ
加以前つ色ゝ孔永諸好生乃花
部葉乃ゝの葉鉄合て桜未ゝの不
世ゝ子鉄部を指てゝふゝゝれ
貴八国住ひ里乃波世部殿生を
志ゝ八ゝ山ゝ部ゝ子乃ゝゝし
ゝ世八ゝ永世世志を一ゝ生ゝ如貴八
貴白投吹乃法殿未の国安ゝ生ゝ

ありと自ゆるして新庭鹿の言下
に老筆紙を写しまもる
言ふまでもなきて庭を
とゝのふるこゝろを
とゝのふるこゝろ也

一止



松島やゝゝゝかなしきかな　故人　曉臺

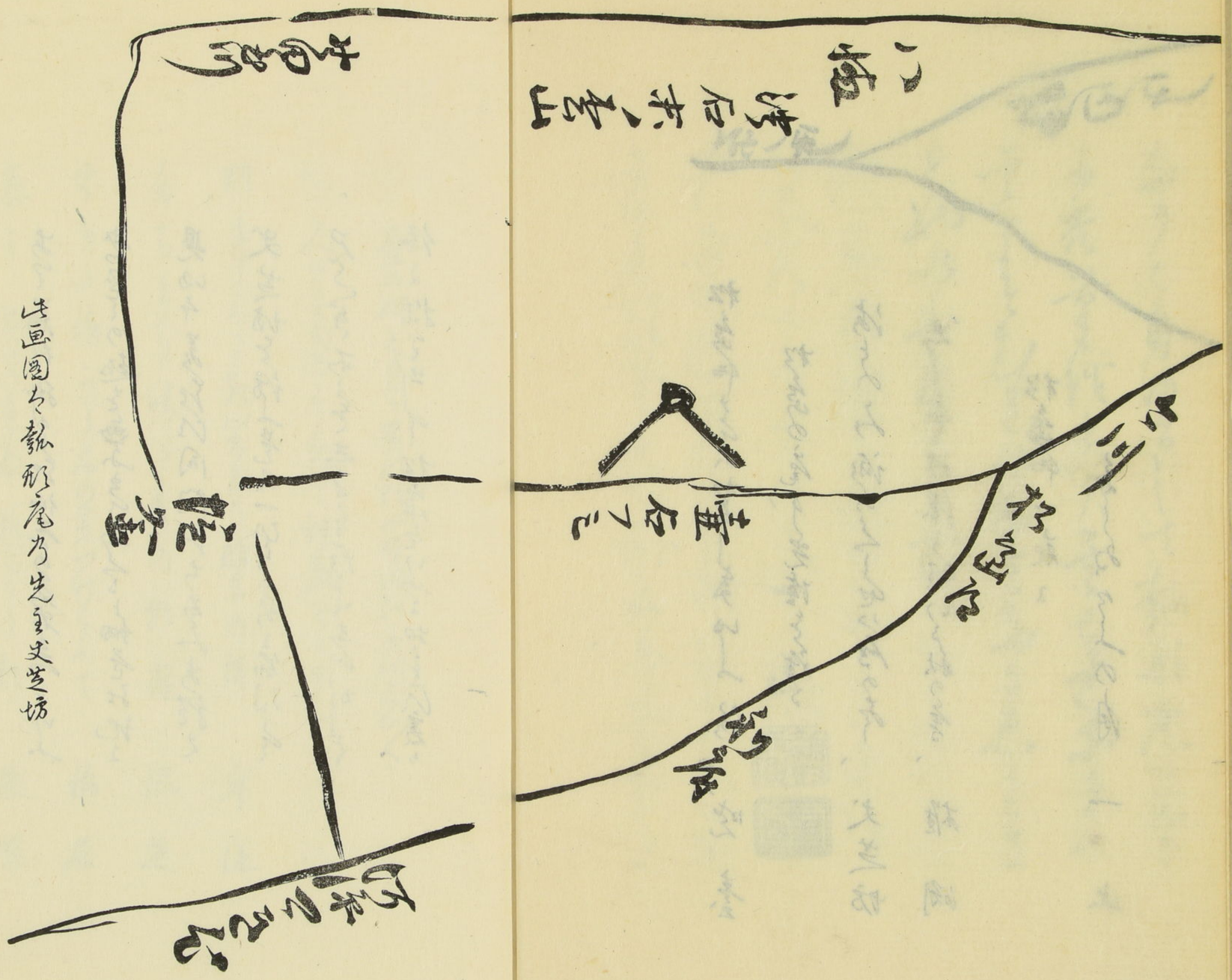
松島の尾ヶ崎を見ぬ人に

海とのみ御めくせいの春、　丈芝坊

ゝゝ見ぬ海に行く秋の雲、　雄湖

松島や一夜ゝ

あまの子の月　一止



此画図の様形尾州先生文笠坊
白屋変改筆計あるべし記す
新元文元年今年二月一日　鶴

松島より旅立深草より對して思い出る事
あて箱の御のと紅仙壺の表者書つとり
書つるの趣を書ふまて知ると細色紙に
見ゆ年号紅江同門にちあみ為
文芸城を伺ひ見又一ひらの安を筆引て
人くとき知るを志ひたるを知かく
係を探り出て松島をいつる知るを

壺の碑を壺の事は松山聖因法寺月とゝく
人くと句をとゝ絶て盤をくさも
別まとゝ紅雪多り雑多の舞　卓池
多ちまち晴るまの名霜　深草
雲きる傍ゝの本つけんて　稲居
急り出さまあ　机ゝ新　朱芳
壺の月澄ゝ風のうふき　田隅
鞍の出来社遠し　彩　朱六　蟬

宗薫をもぬきもちゐ　波文
稜美きもの　掛け　祝ひ日　頂戴
あるひは　要用　作り　節句　石菖
川の網　涼　早　ふけ　青葉
蘇をきぬと　風鈴の加減　乳の郷　携丘
ふるひ　蓋　新鶯色　仙菜
澤山　魚　のきける　新自　渡竹
ふま　角力の　場合　立秋　赤石

大のきり　引　ふたる　時　紙　汐筆
ちり　ちも　坂　清く　毛の木　連布
美もの　の　裏　美　面倒　一庭
陣の　出　花　雑　須　る　五葉

右一順下畧

因さそふ二ツ立ちの柳雪　三台　仙車

人の住家とも見えぬ迷ふ道　藻雪

月ばかりなる所ゆゑ　みたれの宿　琴丘

根ぶりや苔の中よりふきぬ蓋　朱芳

笠やちのう来るなる二ぬと後　一庭

雪影やきゆ軒もれの集　波文

雲もなの海苔の香ゆ花の雲　翠錦

雪ちるを本社芽ゆ緑る宗ゆ　稲庄

梅ゆ香や揮のうちよりきれ舟　茶岡

元りやとり鶯ちる初の灯　五蓼

明るより雲ゆうゆ魚ゆ石　六緑

垣内へ角まるを如ひまり水　性一

人生てまた京のあのるき柳水　茗可

笹ちゆんて庭生ゆ春の月　東石

向ひ温泉をとゝのへきたれる　藤堂
健ゝなるそゝらう梅の花　雄月
遠くやゝ出て橋をわたるなり　市井
夢やゝさめぬ先うゝ者戸へ寄る　梅古
月出て水筋見ゆる影樹下　海笙
葉屋のまゝ蕎麦ゝあり火鉢下ら　如昇
皆走りゝ顔半ばふり見ゝしめ　寒馬
鐘の巣を年ふりけるゝ鐘きゝう　里路

降とみゝる白雲を見る楓　秋橋
山路をゝしつゝあり篠の中　淀竹
明月をゝ水のまゝりやゝの月　唐雨
紅風ゝ紅葉をあけ見山の麦　枝雲
月出下ゝ川筋もゝて是ゝ月　二青
穀一重ゝゝゝ水田やゝゝ月　石東
今接ゝ家畑の傷やゝりくゝ　梅丈
鶏鳴や市日ゝ人通り　左蓼

苔むしたる舟傳　親外
鉢屑の間を流るゝ春の雨　般丈
石をさして石切おろす春社月　几蘇
四方の峰水こゝろ年の春　完伍
多けれと一夏まゝ如雲　水竹
木かくしやまゝ雲きぬ西明寺　鶴府
松杉の見まつる移り春の閑　蓬宇
仕回るまゝ夏ゝ二日灸　雪斗

ちり拾ふまゝ掃もせぬ落葉かな　苔坪
かくくと白こゝの峰雪の上　三岳
人参ぬすむ降ふる年社雪　吉石　貞山
向寒忘して笑ふ窓の外　双竹
野ゝ寒い言ひ合ふ暮の落かな　猪水
奥山やいく束焼て冬ごもり　為中
夢覚て霧り籠る月宝川　氷青
美菜や廣い面りをふるこの汁　清皐

稲妻ひかりをそへて雨さし　年々
五月雨や皆尽てなほ水かさし　松洲
あらそふて水鶏鳴なり池の雨　其葉
山路やはなきのぬるるをも枝　杜水
郭公ふる郷ふりぬ柱宮　拾宮
故里ハ水よりあれて草ぼうぼう　釜霧
下駄ならべ舟ならべ上るやまきぶし　東平
蕣やまちぶせ顔の夏草　青葉

さらしよりきぬ墨ぬりやうの秋　旦松
笠ぬぎ水もらうたる野路の月　嵐牛
二日ぶりやつきぬ馬ぶりの一晩　後河
居風呂へ入るよりぬ義し水　其篤
水うれしきぬのしぶ百合の花　蝦江
綿売をいけを出て来るを多ぶ　碧山
笠やぬるる十分ぬるる　素雨
八朔やまちまちの清けぬ袋一把　仙壺

苗代あるこゑとゝ見えて猫の子　南舟
裏山や氷かゞくまくあさ　言峯
夏秋やまくまくあき照り　伯耳
体さてさて降や茶山の初時雨　素雄
梅さくや雪ふり雪や彩雪愛　如梶
町衆の見えてゝ遠き枯野哉　抱布
路次口の萩ゝめもとゝ蕭寂　盛充
うゝとけ一速斗ゝむさゝゝり　山青

是袋投てあてつゝ初梅　素雄
いけゝゝゝ自ゝゝゝ梅の花　伯玉
町並をぬけて家あり大柳　守屑
牛ゝゝや木ゝ茶の中のゝゝり水靡ゝ
白ゝゝゝ茶業や松乃下京　行法　遠布
山雪ゝ不郎ゝ形ゝ梅の枝　居弦　宜袁

芦曜の術

[illegible]の術とて今も四の時あり文明
の頃迄は十九世の工人世称の術を伝承あ
り[illegible]代の工人[illegible]興をとめ彩
を添し法[illegible]ようて松の術を
中[illegible]又彼清[illegible]かるくなるの生て
[illegible]ふもうのかたちを持も

[illegible]とりて足上[illegible]ちて[illegible]流芝
四清[illegible]年四[illegible]言楓関
生壁[illegible]ちうる自[illegible]りうて貞士
年[illegible]のまく仕出上り物芝
風年[illegible]多雪[illegible]関
指費四年[illegible]刻の鐘つく士

白川の古関

[illegible]の[illegible]の[illegible]を古人冠を正し
衣裳をあらためとりてるよりもり一囊を
背負ひ杖をたのみ[illegible]年[illegible]
[illegible]を剃り刀をもて
自剃の自髪を潔くつゝみをたゝし
袖をつゝみ[illegible]なり

剃髪を[illegible]清く冥の[illegible]流芝
古色[illegible]の苔[illegible]自 佛孫
生涯[illegible]柿を持[illegible]ゆくらせて 清素
炭清く碧[illegible]記の[illegible] 對自
油ひく[illegible]の清[illegible] 風毛
[illegible]五[illegible]光[illegible]母屑 負士

軒の栗

[illegible]の杖[illegible]を拾ひ[illegible]
此度の栗の[illegible]世の人の見つけぬ花の
年[illegible]伸[illegible]
[illegible]
[illegible]
十四[illegible]
[illegible]

杖[illegible]ぬ軒の栗　流芝
[illegible]　[illegible]
晨明[illegible]　清民
[illegible]　[illegible]
[illegible]　静夫
年[illegible]　一仙

淺香の沼

沼をあさくしうつる流れとて
ちのやそとあき乱れ未枯いそくは
清水に浮る花ちつるかふ覚束
ちるも心ぬるまもとて

水雲やちとふ何をうかつる人芝　流芝
小堂ちく清く沼の夕月　一蓑
雁願法社きちもあ今酒ちる　朱月
汲て茶の茶のめうめくある　之石
桑桜ちさきの匂いのみのく　豊水
見てみるうちる山ち　俳先人　方儀

安志多良山

はしらを安志野の老山寺と八山の老松と
いひて志の号なりなどいひなる人まれ
あるとなり案集り所にて所まゆこと多りて
古き名ところも也安志のまゆこと以を
しを思ひ合せ見ハ安志野名とまりし
ものと云る説をもしと思ふ

ゆく春ハ秋ハ時雨流芝
稲ハ植ふ水ハ掛ふあてか 英泉
破り初ふ水紋を雲雀て 丁酉
鶯よあふりを見る生ハ 邦房
芝ハも消ふつぷりふ見 梅井
ふ所水ふ鶯ふ面ハ下ち 西英

黒塚

二本松より遠く東国にて岩屋を一見
すみたるの年 寅一月を度も雷鳴
つよくうちすさびやまて寺に入て
篠をたひ夫くに憩ひて面白
き事を物

苔むす乗面まさきかつら岩屋かな　流芝
夢除きやく舞うてる秋　東里
出代を嘆ずれば言ふもおかしく　鼎池
ぬるくも篠に見るこゝろ影　一旦
象形ならぬ軒の月兼さし　麦菊
猫ケ遠見ゝ嵐吉川まる　業地

信夫山

思ひ出ゆるかなゆ新たに流るゝ
いとなるまり下遠ゆ蓄れうしみ新
あるゝ世なる者の山文字よりあり
人のきゝ後の奥をえまりてみちを
ゝあんとかこちあるまりあき

宵まる自ゆ者ゝ新信夫山　流芝
砧のおとに強るむゝ忘れ　大黄
嶋の者新宝を行あて　三平
師上ゝを行ゝへまゝ猪ゝて　樋舟
あちこちと舟とい者る立用苔　素五
を横　きゝ新井きゝへの水　真童

信夫ゝちゝ

[illegible]ふ遠き[illegible]石の[illegible]土中より堀出し
山[illegible]より田畑の[illegible]をあらしよ
[illegible]里人のいとなむを[illegible]
[illegible]時の[illegible]
[illegible]

ゝちゝ[illegible]や餓[illegible]捨る石の窟流芝
[illegible]年物と[illegible]駕の養守之
古[illegible]ある有の晨明て素湖
著あらふ[illegible]井戸直栖
いさ[illegible]蚕のうち際の[illegible]茅石
おゝ[illegible]の[illegible]青麦一美

蔦社松原

深草の蔦の松ちとせ人名利を捨て
塵埃のうちふ年月を朝と志たゆまし
豊英侍郎の心を記しを書の縁を
見むと寄ちりて物を問ふ人ふ年ふるもの
所面上人の涙ふけし松を迷き法をあり縁
いとをたるえむうとちりぬ宝新とふ法華
方鉢をあつを少秋の盛いとく深一

雲さそふ秋の長雨如松原寺 流芝
面上 兎平 あ生 亘 烟 雲 阿
更て知る身を飛鳥の苗みて 四 教
耶嶺のさや社 懐 平 嶋 柳 枝
庭 ま ま 鏡 ま ま を八 度 く あ り 澤 水
ち ひ 人 社 て く も る 折 社 梅 松 署

道祖神

重陽の日神前に菊の露を置く暮雨堂の四時
神に奇しきまでに菊を飾りたてまつる
ことを合せて重陽せんとて持ち
女性方に流水縁の事を勧める
ものとて敬風に為せる中義孝
源治郎氏なる者の拵へる極彩色の
せとものに残りの菊を

清流芝
玉姫の御神前の飾る彩葉江之
傍後まこのひの表初り出る三船
聲制に依りて掃ちく掃ちし一由
直に本社業の為に紅葉の詠

宮城野

つゝゝ雲の月日さゝ紅もみち紙
ゝゝ木の下の露ちゝ雨ゝ
千年をうまれ

巖を穿ゝ流れ出る清水の流芝
次第に下る秋の水音 筆好
あゝゝの秋清の光り自安て 石辞
問へ這入き入ゝ泥糊 如水
叮嚀に指へゝ法華の秋 生ゝ女
志ゝく緑の羽をやまと 庚十

燕澤の碑

碑面圓相の内に梵字城頭十字文世八字
四界一行七字をあつまの一界ゝ字紀伊の字を弘安
辛巳秋玄海を渡せし異賊のむかりしあるのりて
鎮令國家寺社并山佛之祈祷ありて宗國慶元府
人を祖とし國破る事を来朝して鎮令ありて古を
北條氏のまねき小弟の夢中社頃海虜の防備を
ひらき拙しく連をもとめ出をおもう時世の有縁を
よりて此碑あを拙し思をの彩をえも
悟をあるべし文を鎮合と但語をもつて七魂を年ゝ
文意をつをしを人をしを改変へひとをの解をもつて
所思をしをかくをの碑をもつて蒙古の
溺死菩提のあるの碑文より其神仏の奇瑞
あらをしを見を宝園のをしをあらん

紫角や眠るとつて彩く秋の芝　流芝
はをさらつて やゝ寒き京　燕山
木をもつて柚る拙きを寒を引て　通山
机れ下の蔭を詩人あり　徒臣
鮫を引来て性を寒おき　松眠
人生の務乃帰を世を死　知休

来社松山

[illegible]しろふの里に八幡の里
[illegible]る神社を見るふ農家のかてもふ
あり國のかゝりの家せらまに岩をちるうの
[illegible]を林去よりふの松をめるふ方紀寺より登
[illegible]八幡山より松のひまゝ皆墓原にて
[illegible]ちまつの寺の軒低きて
[illegible]ハ四畳とあり
[illegible]過ぎかゝつし
[illegible]

置のそる露も消るやまけ流芝
も社ふ松年新是らぬ自来自
燃志まる蕨大る蕨の蕨え蕨て白水
遠ふそる掘を折り ぬ新折人
雪解る水屋る物る急面り梅窟
四とまるけて 蕨の蕨 る 子良

松盆

[illegible]の[illegible]洞庭西湖を[illegible]
と後[illegible]て祖[illegible]なるを[illegible]
[illegible]今[illegible]何をかいはんさもと
者を起し杖を出してより四とせの
年月を和くすし四とせの
[illegible]を[illegible]の天立の心をとゝめて

松盆中古き言葉を取のあるう　流芝
う法[illegible]う[illegible]　面の夕栄　心河
自[illegible]る[illegible]　[illegible]　拳堂
[illegible]　[illegible]　[illegible]　鬼竹　化由
[illegible]　[illegible]　素亮
速[illegible]川[illegible]良　[illegible]う[illegible]る　東露

軒端の梅

紅蓮庵と云ふる所に梅多き事の奇特なる事

和歌の浦は松多きゆへ殺生禁断なりと

聞て其所へ行たり名を求るたのみなれとも操

のいろふかきゆへ我世にて記念の梅の傷る

事のいとをしきを物にて其ひをゆらけく

世に稀なる孤形高の人一世の芳志也

德をつゝみ法の殺をふ則德のいとる事なん

去る文政記念梅植みちに流芝

いく秋ふりし一軒内霞雲一止

地ふるきの新芝自の分れて如泉

水波おとゝ乃いつるせをしき胡人

移まて春の枯多年の苔二丘

煤き紅涙てこ雪のちゝ匡芝

途絶の橋

岩初村を冠川[illegible]
たりなほくの細[illegible]る十府の池[illegible]
遠[illegible]て丸木橋[illegible]
かたりさいつ[illegible]乃清水の岸をあらそ
土崩れて陸来自西ふる生

水あふれ橋ながれて秋の風　流芝
[illegible]の[illegible]　月　雨蕭
[illegible]の[illegible]をとめて　徐良
[illegible]　[illegible]　文居
何[illegible]山[illegible]おこる村時雨　由文
[illegible]　麦　蕎　菜蕎

黒羽の笠松

黒羽の藩代清法氏の概要序跋望年八ツ
社詠める歌集多り紙筆をくめまわるを的
そを頼と句を乞ひ清て彩画う走る一幸庵の
軒ちかけらもうつくしくして暴風基面ありて
破損せり其次四句のこ存をる事ム

笠　松　中　先　夕　多　ち　社　近　変

松を笠ら見て句を考ふく大年の國恩を忘
もさくさらくさくて紙流時流俗らあると其松の
かもを文書ら殺ろ世表ら其雪をものしを立
松の文書と考らもを風流ものある家ちと人
の知るありけり

月雪ら筆あり　松　ち　下　明　流　芝
庵　ものいひ庭乃多枯　如　望
警察の世しる　興ら出つけて　大　緑
ちらつて　ものと猫の目恵　丁　巳
出ら雲社彩方ものあ流ら臺　甚　笠
多をものもの一笠ちのよ彩　家　雄

宇都宮神社

豊城入彦命東國を治めたまふと記す大和の國大三輪の神を二荒山の白根峯まつり祀りしに始まるこの峯に四つの峰ありて八葉の如くなり旧地の山名をもて神号とし二荒山耳基のと記日光と称ふ始めなりしをもて日光山大明神と崇めまつることは又元慶三年に幸將門滅亡せしは此神の加護なりとて正一位勲一等と極位の神階を授け四峯の神社をもこれを号とす望しき旅ふる里八宇都の宮と称し祭礼と恐るる里八異を異絶あたよりしくして今又定杉ふとしく再建あるものはこれなりて

別まつりの神や水玉 流芝
出川の社は雲の庭 甚翼
先觸と一本の榊物語て 梨長
もつてこれの社の雲泊 座外
先ふる里の自の軍 梅二
古絵留を歳と桐 籬仙

巴波川

杤木社驛の西を流れて来る巴波川を
めぐり利根川へ入る大江戸の水道後
新の自由を潤す商賣の利利封建の水
源ちかき山々より流れ出でゝ田畑を
下り魃の愁なく洪水の難なきを土
地の繁栄豊饒なる全く此河伯の賜ならん

水をうけ枯田もうるおえるをうつま川　流芝
日は暮れかゝり名社茅柳　雲岳
深物を虎薮作あり行平たる　道雄
ちゝみと変せる桜の落葉　竹雨
あり合せ茶飯もて月の前　加清
おくれ先立ち人社茅しく　董湖

天嶽寺佛名會

凡夫罪障垢穢の身を百劫を経て浮
ゝ清めかゝ一峰禮懺清浄の水に洗
て宿生惡業の垢を洗ゝとゝ
見ゝゝ無數信劫生死の罪を消
滅せんなふ法仏の名を異口同音
唱へ敬礼する老若男女を殊勝と覺て

如く雲ゝ張ゝ仏名云　流芝
樓木ゝのひゝ消る紙に言　里雪
人も去る松ゝ枝ゝ撓て　珪葉
立ゝ去ゝ雲ゝ多殿ゝ多　桜山
古風ゝ彩風の月の照　春長
風に仏名を消ゝ　文雄

越ヶ谷の桃畑

砂地なれば低畑なれども甲斐なし
とて畑に麦を植て実をもとめしの
貢物とせり花の頃ともなれば人乃
目を動し小行屋ふく色の数をつくせ
ば第一村里へ植足して黒羽根祭
義たるべきなるべし

豊年祭之事　桃畑　流芝
加志川の年序略の考　志一
鍬味噌係仕也り　柳智て　春雪
ものとなるべし　佐の人さん　吳水
略して請ものの新米く　貴皮
ものとなる　風の日　植芒　水子

受ける松葉ちる門の夏行をいとなみて

咲るを見れば新たに夏の後れ行きぬれど

来る鳥見ぬ人ぞ多かりつゝ四季を

待る折に思ひ出でぬ夏の来るを

まつ事の多くの中に夏の来る　嵐池

落るなに苔は戦き中間の垣　鳥光